

## 哀れみの家、ベトザタ

### ヨハネ5:1~9 / 李正雨師

病気というものは、人の肉体だけでなく心も苦しませるようです。そして病気になった人だけでなく、介護する家族までも大変にしますね。韓国のことわざの中には「長患いに孝子なし」という言葉があります。いくら孝子、孝行な子供だといっても、親の長い病気の世話はできないということです。それほど、病気とは、私たちに大きな影響を与え、私たちの生活を乱すことなのです。このような考え方のからか、昔の人々は、病気は神の裁きや誤りに対する対価だと思っていました。何か誤ったことがあるから受ける罰だと思ったのです。この考え方はイエス様の時代にも蔓延していました。さらに、病気の伝染を防ぐために、律法は、病気（特に皮膚病）にかかっている人々の隔離を命じていました。そのため、病気になった人々が家族から捨てられる場合も発生していました。

今日の福音書では、多くの病人が集まっている所に行かれたイエス様の話がかかれていています。そこはベトザタという池ですが、ベトザタという言葉は「哀れみの家」という意味です。私はそこが「哀れみの家」と呼ばれていたのには、理由があると思います。私たちが持っているこの聖書には、このベトザタについての説明が抜けています。なぜ「哀れみの家」と呼ばれていたのか、なぜ病気の人々がここに集まっていたのかについての説明は書かれていません。これには理由がありますが、聖書の写本の中でベトザタについての説明が書かれている写本と書かれていない写本があったからです。ですから、聖書を編纂した学者たちは、ベトザタについての説明が後に追加されたと思い、追加された部分を聖書に入れたり、入れなかったりしました。多分何人かの方々は、今日の福音書をお読みになり、4節が抜けていることに気づいていたと思います。この4節はベトザタについての説明です。私たちが持っている共同訳聖書には書かれていませんが、口語訳聖書にはこの箇所が書かれています。口語訳聖書ヨハネによる福音書5章4節の言葉です。「彼らは水の動くのを待っていたのである。それは、時々、主の御使いがこの池に降りて来て水を動かすことがあるが、水が動いた時真っ先に入る者は、どんな病気にかかっているか、いやされたからである。」

ベトザタという所はこのような所です。病気が癒される可能性がある所。回復の希望がある所。それで人々は、そこを「哀れみの家、ベトザタ」と呼んだと思います。ところが、皆様、一度考えてみてください。果たしてその場所は本当の哀れみの家だったのでしょうか。病気を癒す唯一の方法は、主の御使い、つまり天使が水を動かした後、一番最初に入ることでした。しかも、天使はしばしば決まっていた時間に来るわけでもなく、時々来ます。そしてたった一人だけが病気を癒されることができました。おそらく天使が水を動かした後には、そこは阿鼻叫喚が起きたと思います。みんなが池に入ろうとして、大騒ぎになったでしょう。最初に池に入った人だけが恵みを受けることになり、そうではない人々はまた天使が来ることを待たなければならぬのです。次に天使が来たとしても、一番最初に池に入らなければならなかったのが、自分が癒されるとは期待できなかったのです。そして重病にかかった人々、動きが不便な人々は癒される可能性がありませんでした。誰かが助けてくれなければ、癒されるとは想像もできないことでした。しかし、そのような人々も、ベトザタから離れることはできませんでした。ベトザタが病気を癒すことができる唯一の希望だったからです。だから人々はベトザタを離れず、唯一の、多分無駄な希望を持ってベトザタで自分の人生を過ごすしかありませんでした。それでベトザタには38年も病気に苦しんでいた人もいたのです。今日の福音書5節の言葉です。「さて、そこに三十八年も病気で苦しんでいる人がいた。」

私はこのように考えてみました。この病気にかかって38年になった病人を含め、多くの病人たちは、天使が水を動かすことを待ちながら、どんな思いをしたのかという考えです。当時の考え方のように、自分が犯した罪によって病気になったと思ったこともあるでしょう。反省して神様に許しを求めたこともあったかもしれません。しかし、そのような時間が長くなると、恨みも生じ始めますね。自分に対する恨みだけでなく、自分より先に癒された人への恨み、自分を助けてくれない人への恨みなど、いろいろな恨みが生じ始めます。そして、自分を許さずに裁かれた神様に対する恨みも生じたかもしれません。そのため、ベトザタにいた人々は、肉体だけでなく心にも大きな病気を持って生きていくしかなかったらと思うます。

また、今日の福音書2節を見ると、このベトザタという所は、エルサレム神殿の羊の門の傍らにあったと書かれています。この羊の門という所は、神様にささげる捧げ物を連れて入っていった門です。当時、神様にいけにえをささげるといことは、赦しと祝福と関連がありました。自分の罪を赦され、選ばれた民として権利（祝福）を享受すること。これがいけにえを捧げる目的でした。しかし、ベトザタにいた人々は、このようなことを見ているしかありませんでした。神様にいけにえを捧げることも、罪の赦しと祝福を受けることもできませんでした。すべては自分の病気が癒されてからできることでした。ですから、ベトザタにいた人々は、自分たちは神様に捨てられたと思うこともあったと思います。特に長い間ベトザタにいる人々にとっては、このような考えが頭の中いっぱいになっていたでしょう。だから彼らは、すべて元通りになるために、ただ天使が来て水を動かすのを待つしかありませんでした。

今日の福音書でイエス様が行かれた場所は、このような場所でした。哀れみの家という意味を持っていた所でしたが、哀れみとは全く関係ない所。病気が癒されるという希望はありますが、その希望に対する確信はできない所。イエス様はそのような所に行かれ、そこで38年も病気で苦しんでいる人と出会われました。ここで38年というものは、特別な意味があるのではなく、それほど、そこに長く居続けた人という意味だだと思います。長い間、誰の助けも受けられなかった人、38年の間、池に先に入れないほど体が不自由な弱い人、それによって心の病気も持っている人の所にイエス様が行かれました。そして彼にお尋ねになります。「良くなりたか（6節）」すると彼はこのように答えます。今日の福音書7節の言葉です。「主よ、水が動くとき、わたしを池の中に入れてくれる人がいないのです。わたしが行くうちに、ほかの人が先に降りて行くのです。」

この病人の答えには、多くの感情が入っているようです。自分は助けられなかったということ、努力はしたが、癒されることはできなかったということ、自分より先に入った人に対する恨みなど、いろいろな感情が入っていると思います。だから、彼はイエス様に自分の状況を詳しく話します。このように話したのは、多分自分が池に入ることを助けてほしいという願いだったと思います。しかし、イエス様は彼の願いを聞いてくださいませんでした。彼を助けて天使が水を動かすと、一番最初に入れるようにしてくだされませんでした。ただ彼をその場で癒されました。8~9節の言葉です。「イエスは言われた。『起き上がりなさい。床を担いで歩きなさい。』」すると、その人はすぐに良くなって、床を担いで歩きだした。その日は安息日であった。」

私はこのイエス様の奇跡のことを読んで、神様の哀れみというものはこのようなものだと思います。イエス様は38年も病気で苦しんでいる人に、何も求めませんでした。罪を悔い改めなさいという要求もなく、病気を癒すために天使が水を動かす時に池に入りなさいという要求もありませんでした。自分のことを助けてほしいと遠回しに言った病人の要求があっただけです。しかし、イエス様はその場で病人を癒すことによって、神様の哀れみには何の要求や条件がないことを示されました。このベトザタの話が私たちに与えるメッセージは、条件なしに与えられる神様の哀れみについてのことだと思います。神様の哀れみは、一番最初に池に入る人、つまり一等だけに与えられるものではありません。努力する人にもみ与えられるものでもなく、罪を犯さない人にもみ与えられるものでもありません。病人の中でも長く病気で苦しんでいる人に与えられる哀れみです。弱くて疎外され、助けられない人々に与えられる哀れみ、傷ついて捨てられたとされている人々に与えてくださる哀れみなのです。そしてイエス様は、そのような人を自ら訪ねられたことによって、誰でも神様の哀れみの中にいることを私たちに示してくださいました。

9節は、イエス様が38年も病気で苦しんでいる人を癒された日が安息日であったことを語っています。安息日には働いてはなりません。イエス様もそれをご存知でおられたでしょう。しかし、イエス様は安息日に病人を癒されました。これは安息日を守る律法よりも、神様の哀れみが先行されるということを見せてくれるのです。神様の哀れみから私たちに妨げることは何もありません。どの律法も、病気も、罪も私たちに縛ることはできません。そしてイエス様がベトザタの38年も病気で苦しんでいる人の所に行かれたように、私たちがそのような人々の所へ行くべきです。彼らを助け、彼らの必要を満たさなければなりません。なぜなら、イエス様がそうなさったからです。神様の哀れみが私たちと私たちの助けを必要とする人々と共にありますように。イエス様が病気によって苦しんでいる人々に慰めを与えられ、癒されますように、主の御名によって祈ります。アーメン